

8-3 カムイユカラ

「トピパカムイ ヤイエユカラ (ヘウルル)」解説

語り手：平賀さだも

解説：萱野茂

萱野：わたくしたちは沼貝でありました。大きな沼に住んでおったんですけれども、ある夏のこと、ひどい日照りが続きまして、私たちの沼もすっかりカラカラに乾いて、私たちが水が欲しい、水が欲しい、誰か水はくれないかと、毎日泣き叫ぶ日が続けておりました。

ある日のこと声がする。ずっと見ると **saranip** [背負い袋] を背負った女の人がやって来た。私たちを見て、

「何だこの沼貝ども、お前たちはここで何騒いでいた？ 何か騒ぎ声聞こえると思ったら今年はこの、日照りで水が無くてお前たちの声だったのか。」

と言いながら私たちを踏んで踏み潰し、すれ…… そのあげく足で蹴飛ばして、ヤブ原へ蹴散らすというふうにしなからその女の方は行ってしまった。少しすると、向こう側からまだ女の人が来た。やっぱり同じように **saranip** を背負っておる。**saranip** というのはまあ、えー、シナの木の皮であい……

平賀：背負いかご

萱野：編んだ……

平賀：かごだ。

萱野：袋なんですけれども、その **saranip** を背負った人たちが来て

平賀：本当にな、

萱野：して、

「あっ、これはこれは可哀そうに今年日照りなので水不足でこうして

泣いていたの、可哀そうにね。お前たちをここへ置いてはいけない。この **saranip** にいっぱいして集めて背負ってって沢へ入れてあげますよ。」

と言いながら私たち1つ1つを丁寧に拾って、そして、えー背負って行った。そして、えー沢へ流……放してくれた。

しばらくぶりで飲む水の味は本当においしくて、嬉しくて嬉しくて、よくよく見るとその、いやっ……、えー沢へ入れながら言うのには、「お前たちは今まで沼でおったから沼貝と言ったけれども、今度は沢へ入れるよ。今度は、いわゆる沢貝……

平賀：川貝

萱野：えー川貝として、その殻はアイヌたちがヒエを作りアワを作った時の穂ちぎりとして使うであろう。その身は沼でおる沼貝よりも身もおいしくなってアイヌの為にも、そして、えー、神様の為にもなるでしょうよ。」と言いながら私たちを放してくれた。放された数もかなりであったので今ではすっかり、えーえー、拵がってその沢いっぱいになっておった。その沢の名前は **Siraw** という沢。前にいた沼は何ちゅうの？

平賀： **Biraka toho** [平賀の沼]

萱野：おー、**Biraka toho** 平賀の沼であったと、あー、そういうふうに、沼貝が、あー、語りましたという、これ実際その今私たちこの沙流川でも、よく言ったんですけど、その **Siraw** の沢である貝は **pipa** としてもいいんですよ？

平賀：いいの。身が厚いの。

フチ1・フチ2：(絶賛)

萱野：貝が厚いんだってね。うん。あーそうかい。身が厚くていいもんだったちゅう話は聞いたことあるな。

そしてあの、んー、そういうこの沼貝がそういうふうに語ったっていう **kamuyyukar** [神謡] と言って、えっと、さっきの繰り返しは **heururu** というような繰り返し繰り返し、一言一言の間、えーこの言葉を区切って入れながら、やる **kamuyyukar** [神謡] という物語でした。